

◎夏の日友の許に

岩代須賀
川本町

服部 貞子

只今の強雨何と御覽遊ばされ候也。

さても、愉快なる雨にて候ひしかな。

轟々とどろき渡る大雷は、何璫の巨砲の如、閃々たる電光は敵陣をさぐるアークライト、さては、彼我より打ち出だす彈丸の如き激雨かゝる間に、雷し巨砲は焚填や終りけん、霹靂一閃、大地震動して、後の山の一本杉に落雷し命中いたし候さえば、これよりは、此の木を露木とや名付け候はんか。雨戸繰りあけ、庭の面を眺め候ひしに、草々皆倒れ伏して、色を失ひ居り候中にたゞ、燈籠のかげなる白百合一もとのみ、惱みながらも清き香を放ち居り候ひき、こはこれ彼の地なる健治様のお姿となぞらひ、ひとりほゝ笑まれ候。されば、また快活なるお玉章も、近々のうちと存ぜられ候先は虹に向ひ、夕日を背にあびて、拙き筆を運ばせ申して候。かしこ

底本：「女子文壇」明治三十八(1905)年第七號

テキスト入力：小林 徹

公開：令和三年三月二日

リンク：[水野仙子ホームページ](#)

【入力者注】 底本には傍点等が付されていますが、

煩雑を避けるため省きました。